

积論大江千里集（十）

著者	小池 博明, 半沢 幹一
雑誌名	長野工業高等専門学校紀要
巻	56
ページ	1-17
発行年	2022-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1051/00001128/



秋論大江千里集 (十)

小池 博明
半沢 幹一

【前説】

本稿は、以下に示す論文の続校である。

「秋論大江千里集 (一) (二) (四) (六) (八) 」(『長野工業高等専門学校紀要』五一号
～五五号、二〇一七年～二〇二二年。いずれも電子版のみ)

「秋論大江千里集 (三) (五) (七) (九) 」(『共立女子大学文学部紀要』第六五集～
第六八集、二〇一九年～二〇二二年)

今回は、秋部の三六番歌～四〇番歌の五首を取り上げる。

本秋論全体の目的と意義の詳細、凡例や参考文献などについては、「秋論大江千里集 (一)」
を参照されたい。

【秋論】

秋来只識此身哀(秋来りて只識る、此の身の哀しきを)

三六 おほかたのあきくるからに我身こそかなしきものとおもひしみぬれ

【通釈】

例年どおりに秋が来ると(決まって悲しいが、今年は何ならぬ我が身が、(いつも以上に、
秋を) 悲しいものと思ひ沁みることであるよ。

【語釈】

おほかたの 「おほかた」 は名詞で、特殊ではなくて一般的であることを表わす。万葉集には、

「おほかたは (凡者) 誰が見むかともぬばたまの我が黒髪をなびけて居らむ」 (万葉集・十一・
二五三三)、 「何時までに生かむ命をおほかたは (凡者) 恋ひつつあらずは死ぬるまされり」

(万葉集・十二・二九一三) 「おほかたは (大方者) なにかも恋ひむ言奉げせず妹に寄り寝む年
は近きを」 (万葉集・十二・二九一八) の三例、見られる。いずれも恋歌で、「おほかた」 は人

に関してであり、係助詞「は」によって、対比的に、詠み手が特殊であることを示唆する。「お
ほかたの」という連体修飾句の形は古今集前後から見られ、当歌と同じく「秋」を修飾する例が

最も多く、「おほかたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひしりぬれ」 (古今集・四・秋
上・一八五) という、当歌と同じ歌をはじめ、「おほかたの秋のそらだにわびしきに物思ひそふ

る君にもあるかな」 (後撰集・七・秋下・右近・四三三)、 「おほかたの秋に心はよせしかど花
見る時はいづれともなし」 (拾遺集・九・雑下・とし子・五一〇) のように、その後も類型的に

現れる。この句は当歌以前に用例を見出したので、当歌句が後世に享受された結果と見られ
る。ただし、本集とは関係なく、古今集の歌としての享受であろう。なお、「おほかたのあき」

は、本集四〇番歌にも、同じく初句に見える。「おほかたの秋」の解釈として、全釈では、当歌については「誰にでもおとずれる(ただでさえ悲しい季節である)秋」、四〇番歌については「秋を悲しむのは世の人皆そうなのだ」としている。古今集所載の当歌についても、現行の諸注釈書はほぼ同様の解釈をとっている。つまり、「おほかた」は人に関して用いられているという(こと)であり、それは後続の「我身」との対比という点から言えば、もつともな(こと)かもしれない。しかし、「おほかたの秋」という表現から、「誰にでもおとずれる秋」という解がはたしてそのまま引き出されるであろうか。単純に考えれば、一般的な秋つまり例年と変わらない秋、ではあるまいか。また、「おほかたの」の「の」は「すぐ後に続くのが名詞「あき」であるから、連体修飾関係を示している」と見られるが、たとえば「例の」という表現が、「日暮るるほど、例の集まりぬ」(竹取物語)、「中将、例のうなづく」(源氏物語・帚木)などのように、副詞的にも用いられることを考え合わせると、「あきくる」という動詞句を連用修飾しているとみなすこともできよう。右記の類例もそのようにとって、解釈に差し支えない。詳しくは【補注】参照。

あきくるからに 句末の「からに」は、原因・理由の格助詞「から」に格助詞「に」が付き、接続助詞的に、その前後が原因と結果の関係にあることを示す。ただし、已然形「ば」に比べれば、因果関係としての結び付けは弱く、「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ」(古今集・五・秋下・文屋康秀・二四九)、「ちはやぶる神やきりけむつくからにちとせの坂もこえぬべらなり」(古今集・七・賀・遍照・三四八)などでは、接続助詞の「と」に近く、因果関係というよりも、前後の動作・現象の継起的な生起を表わすととれる例もある。当歌も、秋が来たので悲しくなるという、単純な因果関係ならば、わざわざ示すまでもなく、「おほかたの」も「我身こそ」も不要であろう。これらが付け加えられたのは、そういう常識的な因果関係を越えたところを表現しようとしたからではないかと考えられる。当歌において「からに」が用いられたのは、秋が来ること自体ではなく、それが「おほかた」であるにもかかわらず、今年だけは通常の因果関係とは異なるという、逆接性のニュアンスを含む関係でもあることを示そうとしたことによる。

我身こそ 「我身(わがみ)」は本集に八例あり、千里が比較的好んで使用したと見られる。一九番歌【語釈】「わが身のみこそ」の項を参照。「我身」と表現するだけでも、他の(一般の)人との対比が含意されるが、当歌ではさらにそれが「こそ」によって強調されている。同様の例

は他にも、「かすがのはなのみなりけりわが身こそぶひならねどもえわたりけれ」(後拾遺集・十四・恋四・藤原兼家・八二四)、「わが身こそいつともしらねなかなかにむしはあきをぞかぎるべらなる」(好忠集・二四四)など、見出せる。ただし、これらで対比されるのは、人ではなく、春日野(の飛火)や秋の虫である。

かなしきものと 「かなしきもの」は、万葉集に「……思へども悲しきものは(悲物者)

よのなか 世間にそある よのなか 世間にそある」(万葉集・十三・挽歌・三三三三〇)の一例のみであるが、平安時代以降は、「しかすがにかなしきものはよのなかをうきたつほどのころなりけり」(後拾遺集・十七・雑三・馬内侍・二〇二二)、「おもひいでのかなしきものは人しれぬ心のうちのわかれなりけり」(重之集・二五)のように散見される。これらの例のように、「かなしきものは」という形で、一首全体の主題となり、歌末を「なりけり」で結ぶ、いわゆる「なりけり」構文を構成することが多い。当歌の「かなしきもの」は格助「と」を下接し、「おもひしむ」内容を示す引用句とするが、類例は少なく「別をば悲しき物と聞きしかどうしろやすくもおもほゆるかな」(後撰集・九・恋一・五七三)が見られる程度であり、この歌での引用句は「別をば悲しき物」の部分である。「かなし」単独ではなく、「かなしきもの」とするのは、「もの」によって、その感情を概念化する、つまり一時的ではなく、不変な感情であることを表わすためである。当歌において、その対象なるのは、全釈では「我が身こそかなしいものだ」とあり、古今集所載の同歌についても、「わが身をこそ、悲しい存在なのだ」(新日本古典大系本)とあり、我が身とする説が大勢を占める。これは「我身こそかなしきもの」という表現のまとまりを優先することに由来。しかし、省略されている秋を対象とする可能性もある。【補注】参照。

おもひしめぬ 「おもひしむ」は、『日本国語大辞典』第二版に「心にしみこむほごに思ふ。深く思いをかける」とあり、落窪物語・枕草子・源氏物語などの用例が載る。和歌の用例は稀で、平安時代まででは、「たなはたのふたたびとだにあひみねばわれはかなしとおもひしみにき」(道濟集・一三三三)、「……人 にことなる ふししはは はかなき事も さもぞただ ためしもなきと 思ひしむ ことのおほきは……」(艶詞・七八)しか検索しえない。異本系書陵部本の結句は「おもひしりぬれ」とあり、古今集所載の同歌も同じであり、この「思ひ知る」という語のほうで、「思ひ沁む」よりも一般的であったのであろう。ただし、蔵中校本によれば、流布

本系統の本文は、「しみぬれ」(フートルダム清心女子大本)、「しみぬれ」(多和文庫本)などのように傍書はあるものの、本行本文で「おもひしりぬれ」とするものはないようであり、解釈も可能なので、底本のままとする。「おもひしむ」に完了の助動詞「ぬ」が下接するのは、その内容を深く認識しおさせたことを表わす。歌末の「ぬれ」は、第三句末の「こそ」の結びととのりが順当なところであるが、「我身」をどのように位置付けるかによって、問題が生じる。すなわち、前項で触れたように、「我身こそかなしきもの」の全体を引用句とみなすと、結びは流れているのであって、「ぬれ」が結びとなるのは、係り結びの法則に反する。ただし、「なほいみじき人ときこゆれど、『よなくやつれてこそまうづ』と知りたれ」(新日本古典文学大系枕草子・一一四段)のように引用句中に係助詞があり、その外にある「と」動詞(助動詞)「が、結びとなる場合があるという例外も認められているようである(小田勝『古代日本語文法』ちくま学芸文庫 二〇二〇年)。当歌の場合、そのような例外とすることもできなくはないが、「我身」を引用句外で、「おもひしむ」の主格相当とし、「我身こそかなしきもの」とおもひしりぬれ」とすれば、ごく普通の係り結びが成立する。その場合、かなしきものと思つ対象の表現は省略されていることになり、それが「我身」なのか「秋」なのか改めて問われる。「おもひしむ」の主語としては「我身」よりも「我」のほうが自然であろうが、「おもひしむ」の「しむ」には「身」を付すほうが似つかわしからう。

【補注】

古今集の同歌について、金子元臣『古今和歌集評釈 昭和新版』(明治書院 一九二七年)は、契沖以来、「わが身こそ秋を悲しきものと思ひ知る」(傍点金子)とされてきた解釈を、本集の句題「秋来只識此身哀」を根拠に否定し、一首の大意を「世間一統の秋が来るにつけて、自分は悲しく感ずるのに、他人はさほどにも思はぬのを見ると、秋の為悲しいのではなく、素(す)からの自分がサ、悲しいものぞと思ひ知つたわ」(傍点筆者)とし(ただし、すでに竹岡正夫『古今和歌集全評釈』(右文書院 一九七六年)が指摘するように、契沖の古今余材抄に一八五番歌に關する注は全くない)、それ以後これが通説となっている。

通説となるには、句題との関係のみならず、係り結びの問題もあるにもかかわらず、「我身こそかなしきもの」を「ましまりの引用句とする見方が受け入れられたということもあるだろう。

しかし、そもそも、古今集の同歌は、よみ人知らず、題知らずとされてはいるものの、秋歌上の部立に含まれるものであるから、「秋の為悲しいのではなく」という金子の解釈は、古今集編者の意図から外れてしまっているのではないだろうか。

翻つて、当歌も本集秋歌の三番目に位置付けられているのであるから、秋という季節を主題あるいは契機とする歌として、千里が詠作・配列したと考えるのが順当であろう。古今集の秋歌上には、千里歌として「月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」(古今集・四・秋歌上・一九三)という、悲秋歌の典型とされる歌もある。この歌の「わが身ひとつの秋にはあらねど」が、古今集の同歌および本集の当歌の解釈にも影響を及ぼしているのではないかと考えられる。その影響のバイアスが、「わが身ひとつ」のほうに掛かっているか、「秋にはあらねど」のほうかによって、解釈が分かれたと考えられる。

部立および初句の「おほかたの」の修飾関係および係り結びの関係などをふまえて、当歌の言わんとするところを考え直してみれば、次のようになろう。

秋という季節そのものは今年も例年どおり来る。秋には物悲しい気分になるものである。ただ、例年どおりなのにもかかわらず、今年の秋は物悲しい気分が、なぜか私には自分の体にしみいるほどに感じられることであるよ。

ちなみに、古今集には大江千里名で一〇首が入集しているが、九九八番の「あしたづのひとりおくれでなくこそは雲のうえまできこえつがなむ」(本集二二〇番歌)の一首以外は、どれも本集には見られない。ということは、残りの九首は本集以外の資料から採録されたということであり、あるいは九九八番歌もたまたま本集にもあるだけのことであって、古今集編集の際に、本集は採録資料に入っていないなかったのではないかと推測される。当歌を句題和歌としてではなく、よみ人知らず、題知らずとするのも、何らかの憚りがあつてということではなく、単に、和歌だけ載せる別の資料から採られたせいなのかもしれない。当歌が、赤人集に「おほかたの秋くるからにわがみこそかなしきものとおもひしりぬれ」(赤人集・六一)、猿丸集に「おほかたのあさくるからにわが身こそかなしきものとおもひしりぬれ」(猿丸集・三七)の本文で載るのにも、同様の事情があつたのではあるまいか。

【比較対照】

原拠詩は、次に挙げる、白氏文集の七言律詩「新秋早起 有懷元少尹」（卷第十九・二二四）であり、句題は首聯の第一句によると見られる。確定的に言いがたいのは、本集句題との異同が目につくからである。

秋来転覺此身衰 秋来りて転た覺ゆ、此の身の衰へたるを、

晨起臨階盥嗽時 晨あしたに起き、階に臨みて、盥嗽くわんさうする時。

漆匣鏡明頭尽白 漆匣しつかふ、鏡明らかにして、頭尽く白く

銅瓶水冷齒先知 銅瓶、水冷かにして、齒先づ知る。

光陰縱惜留難住 光陰は縦ひ惜しむも、留めて住め難く、

官職雖榮得已遲 官職は栄ゆと雖も、得ること已に遅し。

老去相逢無別計 老い去りて、相逢ふも別計無し、

強開笑口展秋眉 強ひて笑口を開きて秋眉を展のぶ

句題では、第三字の「転」が「只」に、第四字の「覺」が「識」に、そして末字の「衰」が「哀」になっている。藏中校本によれば、底本をはじめ流布本系では、注記に「秋来転覺此身衰」とするもの一本、見せ消ちでそれと傍書するもの一本があるが、それら以外はすべて「秋来只識此身衰」となっている。一句全体の内容の類似性は認められるものの、これだけ用字が異なる、そもそも千里が参看したテキストとの違いが想定されるがいまだ確認しえないので、底本のままにしておく。

当詩は、白詩なじみの嘆老をうたったものであり、漢詩由来とされる悲秋の觀念そのものを主題としてはいいない。ただし、第二句以降での老衰の実感、秋冷ゆえに生じた見れば、季節と無関係とは言い切れない。そして、その実感が最終句の「秋眉」とも結び付き、「哀」という感情と結び付けるのも不自然ではないであろう。

表現上の対応関係を見ると、句題の「秋来」にはそのまま歌の「あきくる」、「此身」には「我身」、「哀」には「かなしき」が対応し、「只識」には、その意味を汲んで「こそ」と「おもひしみぬれ」がセットでほぼ対応していると言えよう。

つまり、当句題の本文である限りは、当歌はそのすべてに対応しているといえることである。ただし、表現同士の関係としては、句題の「此身」が「識」ではなく「哀」と結び付くのは明らかである。

歌のほうから見た場合、付加されたのは「おほかたの」と「からに」と「もの」である。「もの」については【語釈】に述べたとおりであり、「からに」は、原拠詩に対応語が見出しがた、おそらく和歌における関係付けの一環からであろう。

「おほかたの」も、句題からも、原拠詩当該句からも導かれたいが、指摘しうるのは、次の一点である。

一つは、原拠詩全体を見渡しても、他の人たちの比較はされていないということ、もう一つは、原拠詩後半からは、老いは急にはなく次第にもたらされたということである。これらが示唆するのは、「おほかた」が一般的な人のことではなく、長年過して来た秋のことではないかということである。

嘆老の詩を秋の歌として主題を転換するのは、三五番歌でも行われたことであって、異例というわけではなく、もとより句題の直訳としては成り立ちえない。嘆老を主題とするならば、本集でも述懐の部立があり、そこに位置付けられるべきであろう。なぜ他ならぬ「我身こそ」なのかは、受け手に委ねられているのであって、白氏の原拠詩が思い浮かべられることを排除するものではないが、秋ならではの、それぞれに異なる私的な事情が想起されることもありえよう。

霜草多枯虫思忽（霜草は多く枯れ、虫の思ひ忽たり）

三七 おくしもにくさのかれゆくときよりぞなくむしのねもたかくきこゆる

【通釈】

置く霜のせいで草が枯れてゆく時(すなわち秋)から、まさに鳴く虫の音も高く聞こえることであるよ。

【語釈】

おくしも 霜は、「……み雪ふる 冬に至れば 霜置けど(霜於氣騰母) その葉も枯れず(其葉毛可礼受) いやさかばえに……」(万葉集・十八・大伴家持・四二二)、**忘草**がれもやするとつれもなき人の心にしもはおかむ(古今集・十五・恋五・源宗千・八〇二)のように、植物を枯らせるものとして、また冬の景物として詠まれることが多い。秋に詠まれる場合は、「霜のたてつゆのぬきこそよわからし山の錦のおればかつちる」(古今集・五・秋下・藤原関雄・二九二)、「くれてゆく秋のかたみにおく物はわがもとゆひのしもにぞ有りける」(拾遺集・三・秋・平兼盛・二二四)とあるように、晩秋の景物となる。霜の発生は、静態的な動詞「おく(置)」か、動態的な動詞「ふる(降)」で表わされ、万葉集ではほぼ同数であるが、八代集では、圧倒的に「おく」が多いという(半澤幹一・津田潔『対訳新撰万葉集』勉誠出版 二〇一四年)。本集でも、「おく」しか使用されていない。久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店 一九九九年)の「霜」の項には、「漢詩の霜の世界に対する好尚と質が千里集や和漢朗詠集に見られる」(山田洋嗣執筆)とある。たしかに、霜の用例数は、古今集一〇例に対し、本集九例(三二・三五・三七・四一・四八・四九・六一・六五・一一六)であるから、本集で好まれた素材の一つといえる。また、古今集では、半数が恋部で四季部には秋に一例のみであるのに対して、本集では詠懐の一六番歌を除き、残りはすべて四季部にあり、夏部に一例(ただし比喩として)、秋部に当歌を含め五例、冬部に二例、見られ、秋が中心である。句末の「に」は格助詞で、次句の「かれゆく」の原因を表わし、置く霜のせいで草が枯れゆくことを示す。

くさのかれゆく 「くさ」の「の」は、「くさ(草)」が「かれゆく」の主格であることを示す。「かれゆく」の「ゆく」は、前項動詞「かる(枯)」が継続・進行していることを表わす。「かれゆく」は、万葉集に一例、「……雨降らず 日の重なれば 植多し田も 蒔きし畠も 朝(ごと)に 潤み枯れ行く(可礼由苦……)」(万葉集・十八・大伴家持・四二二)があるが、古今集前後から用例は増え、「ごと人の事は夏ののしげくともかれ行くきみにあはざらめやは」(古今集・十四・恋四・七〇四)、「時すぎてかれゆくをのあさぢには今は思ひぞたえずもえけ

る」(古今集・十五・恋五・小町が姉・七九〇)などのように、恋歌において「枯れ」と「離れ」の掛詞として用いられる例が目立つ。

ときよりぞ

「とき(時)」は初句・第二句の連体修飾句を受ける。つまり、無限定の「とき」ではなく、「おくしもにくさのかれゆく」という特定の状態にある時を表わす。格助詞「より」は、動作の起点を表わし、「とき」に下接することから、時間的な意味での起点である。当歌の場合、霜のせいで草がしだいに枯れてゆくという事態になる時が起点ということである。それを起点とする動作が、「むしのねのたかきこゆる」である。なお、「より」には比較や理由の用法もあるが、当歌ではとりがたい。「ときより」の用例はそれほど多くはなく、「橡つるばみの衣は人皆事なしと言ひし時より(日師時徒)着欲しく思ほゆ」(万葉集・七・二三二)、「屏風の多なる花をよめる／さきそめし時よりのちはうちへて世は春なれや色のつねなる」(古今集・十七・雑上・紀貫之・九三二)などあり、これらで注意すべきは、過去の助動詞「き」で統括される連体修飾句が上接するという点である。これはすなわち、後続の動作の起点となる時点で、それに先行するものとして関連付けられる動作は過去の出来事であって、後続の動作の生じる現在には及んでいないということである。本集には、もう一例「かぎりとはるのすぎにし時よりぞなくとりのねのいたくきこゆる」(二七)に見られるが、これも「すぎにし」のように「き」が用いられている。ところが、当歌においては、「とき」の直前に、「き」とは対極的な「かれゆく」という、継起性を示す表現になっている。【補注】参照。

なくむしのねも 単独語としての「むし(虫)」は、万葉集では、「この世にし楽しくあらば来む世には虫(蟲)にも鳥にも我はなりなむ」(万葉集・三・大伴旅人・三四八)の一例のみ。複合語としても「……望月の 足れる面わに 花のごと 笑みて立てれば 夏虫(夏蟲)の 火に入るがごと」(万葉集・九・一八〇七)があるだけである。いずれも当歌のような、秋に鳴く虫ではない。それが、本集では、当歌を含め「むし」が四例(三七・四五・五〇・五五)あり、すべて秋に鳴く虫である(ただし、五五番歌は「なくせみ」も詠み込まれる)。「なくむしのね」という句は、「草村のそこまで月のてらせばやなくむしのねのかくれざるらん」(順集・二五〇)

くらいまで下らないと、見られない。句末の「も」には並列の含意は認められないことから、詠嘆を表わすと見られる。

たかくきゆる 虫の音声について「たかし(高)を用いる例としては、「くさむらになくむしよりはたかけれどよくもきこえぬかりのひと」(相如集・四三)「すずむしのあきのやどり はくさむらにつゆやおくらむ」(多たかなく) (三左大臣殿前歌合・一五)などが檢索しているが、稀少である。時代が下ると、「夜をかきね」(多よわりゆくむしのねに秋のくれぬるほどをしるかな) (千載集・五・秋下・藤原公能)、「むしのねのよわるのみかは暮るる秋をしむわが身を先消えぬべき」(後葉集・十七・雜二・近衛院・四九五)、「霜がれの浅ちがもとにさ夜ふけてほのなきこゆる松むしのこゑ」(相模集「書陵部蔵五〇一・四五」・一九)などのように、その声が高くではなく、逆に、小さく、弱くなるさまが詠まれるようになる。

【補注】

【語釈】「ときよりぞ」の項で述べたように、「ときより」が示す起点という点に着目すれば、助動詞「き」がそれ上接するのが一般的であるの対して、当歌ではなぜそう表現しなかったかが問題になる。「くさのかれゆく」と「なくむしのねのたかくきこゆる」が同時並行的な事態とするならば、「ときよりぞ」という起点表示が意味を成さないからである。

草が枯れるのは総体として見れば、漸次的であって、それが「くさのかれゆく」と表現される継起的な事態である。その事態は、霜が発生する秋になってから生じ、かつまたすべてが枯れ果ててしまっていない。つまり、夏でも冬でもなく、秋の推移にともなう「かれゆく」ということである。これはつまり、「おくしにもくさのかれゆくとき」というのは、秋という季節全体のことには他ならない。これに過去の助動詞の「き」を用いれば、それは秋の終わりあるいは冬の初めに限定されてしまうのである。

このように考えれば、歌意としては、虫の声が高く聞こえるのはまさに秋という時になってからである、という(こと)になり、「より」が起点を表わす(こと)も、「おくしにもくさのかれゆく」と「なくむしのねもたかくきこゆる」が同時並行的な事態である(こと)も矛盾しない。さらに、「ときよりぞ」の「ぞ」の強調は秋という「ときより」に対するものであり、虫の声のありように気付く時期として際立たせていると「言える」。

草が枯れるのを、虫が鳴くことに関連つけた例としては、「あきくれはむしとともにななかれぬるひと草はもかれぬと思へば」(是貞親王家歌合・三三)、「あきかぜにすむよもきふのかれゆけばこゑのこゑとむしぞなくなる」(是貞親王家歌合・四五)「くさがれのほどちかければあきのむしやどもあらはになきよわるかな」(惠慶集・一一〇)、「くさがれの秋にやたへぬなくむしのよぶかくなりて」(道落集・二七六)などがあり、両者は因果関係にある同士として表現されている。赤人集所載の同歌に関しても、和歌文学大系本は、霜枯れと虫の声との関係を、「晩秋に虫たちの鳴く声がこれまでに増して高く聞こえるのを草が枯れてゆくのを怨み悲しんで鳴いていると考える」と説明する。

本歌の表現は、二つの事態を因果関係として捉えず、「より」によって、時間的な関係としていえる。とはいえ、一首にたまたま当該の二つの事態を取り上げたとは考えがたいのであって、時間的な関係のみならず、両者さらには詠み手の心情も含めて、何らかの関係を認める解釈も成り立ちえよう。

ただし、「おくしにもくさのかれゆくとき」という表現が秋という季節の推移を象徴的に表わすものだとすれば、当歌の主眼は虫の声にあるのであって、實際上の草と虫を関係付けていることにはならない。また、和歌文学大系本の「虫たちの鳴く声がこれまでも増して高く聞こえる」のように、草枯れの進行にともなう虫の声の程度の上昇までは、読み取りえない。「なくむしのたかくきこゆる」という表現は、あくまでも秋になると、そのように聞こえるということであって、秋の深まりまでは関与していない。

そもそも、本集における季節部の歌の配列は必ずしも時系列に即したものとは言えないものの、秋部二五首のうちの五番目に位置する当歌を晩秋の歌とみなすには疑問が残る。

なお、赤人集に「おくしにもくさのかれゆくときよりぞむしのなくねもたかくきこゆる」(赤人集・六二)の本文で載る。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の七言律詩「答夢得秋庭独坐見贈」(卷第六十六・三三八七)であり、句題は領連の第一句による。

林梢穩映夕陽殘 林梢、穩映として夕陽残り、

庭際蕭疎夜気寒 庭際、蕭疎として夜気寒し。

霜草欲枯虫思急 霜草は枯れむと欲して虫の思ひ急たり、

風枝未定鳥棲難 風枝は未だ定まらずして鳥の棲むこと難し。

容衰見鏡同惆悵 容は衰へ、鏡を見れば惆悵を同じくするも、

身健逢盃且喜歡 身は健やかにして、盃に逢へば且し喜歡す。

応是天教相煖熱 応に是れ天の相煖熱せしめ、
たんねつ

一時垂老与閑官 一時に老いを垂れ、閑官に与るべし。

ただし、底本の句題は「霜草多枯虫思急」であつて、右に示した原拠詩とは、二字目の「多」と「欲」、七字目の「忽」と「急」で異なる。全釈は誤写と見て、原拠詩に従っている。

たしかに、当歌の表現から見れば、「多」より原拠詩の「欲」にふさわしく、「たかく」も底本「忽」(たちまち、突然)より、原拠詩の「急」(気ぜわしい)のほうがしっくりこよう。しかし、ともに解釈に関わる決定的な違いとまでは言えないので、本釈論の原則どおり、底本のままとしておく。

原拠詩は、その題にあるとおり、秋の季節に作られたものであるが、秋のどの時点かまで特定されない。前半の自然の四句のどれもが秋歌の句題となりえたであろうが、当句が選ばれたのは、草と虫を詠む点で和歌になじみやすいと考えられたのではないだろうか。

表現の対応関係としては、句題の「霜草」には歌の「おくしも」と「くさ」、「枯」に「かれ」、「虫」に「むし」が対応している。句題の「多」には、歌の「かれゆく」(この結果が関連し、「思急」には、歌の「ねもたかくきこゆる」(この理由として結び付けられよう。この程度)の関連のさせ方は、句題の直訳ではない本集歌において決して珍しくない。

和歌に新たに付加されたのは、関係付けの表現で、第二句の「ときよりぞ」は第一・二句と第四・五句を時間的な前後関係として結び付け、また初句の「おくしも」の「に」は【語釈】に述べたように、第二句の「くさのかれゆく」と、原因結果の関係として結び付けている。どちらも、句題ではそれぞれの関係付けが示されていないのを、一首の和歌としての文脈を構成するための表現操作である。とくに「ときよりぞ」の付加は、句題における単なる並列とは異なる関係

付けによって、句題にはない、秋という季節を取り立てる、和歌独自の季節歌らしい意図を示している。

今宵織女渡天河今宵 織女 天河を渡る

三八 ひととせにただこよひこそたなばたのあまのかはらをわたるといふなれ

【通釈】

一年のうち、ただ今宵だけ、(かの唐では「彦星ではなく」織女が天の河を渡る)のだからだがなあ(それに対して、日本では、わざわざ逢いに来た私に、あなたはつれないことであるよ)。

【語釈】

ひととせ 「ひととせ」は、本集に三例(二・三八・五八)ある。万葉集に四例、八代集では最も多い古今集で四例しかなく、本集での比率は高く、すべて格助詞「に」を下接する。「ひととせ」は、一年の単位で一度のものであることを詠む際に、使われることが多い。二一番歌【語釈】該項を参照。その典型的な出来事が当歌の素材となる七夕であり、「一年に(二年尔)七日の夜のみ逢ふ人の恋も過ぎねば夜は更けゆくも」(万葉集・十・二〇三二)、「ひととせにひとよとおもへどたなはたのあひ見む秋の限なきかな」(拾遺集・三・秋・紀貫之・一五〇)、「一年に一夜のみあふたなばたを立ちなかくしそあまのかはぎり」(清正集・二六)など、万葉集から用例がある。この句は、意味・文法的には次句の「ただこよひこそ」とともに、第四句の「わたる」を修飾すると見られるが、「こそ」の係り結びとの関係からは、そのようにはとれない。【補注】参照。

ただこよひこそ 「こよひ」は、秋歌でもあるから、七月七日の当夜を指すと考えられる。程度の副詞「ただ」は事柄や数量を限定して、わずかに、たったの意。係助詞「こそ」とあいまって「こよひ」を、織姫と彦星の逢瀬が一年のうちで七月七日の今夜だけと限定する。「ただこよひ」は、すでに万葉歌の七夕詠に「ただ今夜(直今夜)逢ひたる児らに言問ひもいまだせずしてさ夜明けにける」(万葉集・十・二〇六〇)があるが、平安時代以降(特に院政期以降)は当歌のように、「あらたまの年の三年を待ちわびてた今宵こそにひまくらすれ」(伊勢物語・五

二二)、「わたし守ふなどよみすな七夕のとしにあふ夜はただ今夜のみ」(堀河百首・七夕・藤原仲実・五八三)と、「のみ」「こそ」を下接する用例が大半を占めるようになる。一六・二二番歌【語釈】を参照。句末の「こそ」の結びについては【補注】参照。

たなばたの 「たなばた」は織姫と彦星のどちらを指す場合もあるが、述語となる「あまのかはらをわたる」の主格に相当するのは、和歌においては、男の彦星のほうである。しかし、当歌に關しては、それが当てはまらない。【比較対照】参照。

あまのかはらを 「あまのかはら」は、天の河の河原。「河原」は、「川辺の水がかれて、砂、小石の多い平地。川沿いの平地」(『日本国語大辞典』第Ⅱ版)であって、川そのものではない。

万葉集には、「……ひさかたの 天の川原に(天河原) 天飛ぶや 領巾片敷き ま玉手の玉手さし交へ あまた夜も 寝ねてしかも 秋にあらざとも」(万葉集・八・山上憶良・一五二

〇)、「我が恋ふる丹の穂の面わ今夜もか天の川原に(天漢原 石枕まく)」(万葉集・十・二〇〇三)

〇〇三)「……ひさかたの 天つしるしと 定めてし 天の河原に(天之河原) あらたまの月重なりて 妹に逢ふ 時さもらふと 立ち待つに……」(万葉集・十・二〇九二)と、そのとおりの意で詠まれている。しかし、平安時代になると、「いつしかとまたく心をはぎにあげてあまのかはらをけふやわたらむ」(古今集・十九・雑林・藤原兼輔・一〇一四)、「けふよりはあまの河原はあせなんそこひとなくなつたわたりなん」(後撰集・五・秋上・紀友則・二四二)のように、天の河と同義と見られる用例が散見する。当歌もその早い例の一つ。

わたるといふなれ 「わたる」場所は前項に示した「あまのかはら」であり、それが成り立つのは天の川を「わたる」ことも含んでのことである。格助詞「と」は、その内容からすれば、初句「ひととせに」から「わたる」までを引用すると見られるが、表現上のねじれが認められる。【補注】参照。「といふ」の「いふ」は実際の誰かの発話ではなく、これ自体が伝聞を表わし、下接の助動詞「なり」の意を重なる。「といふなり」は、万葉集には見られないが、古今集以降は類型化して、二つのパターンに大別される。一つは、「みちのくに有りといふなるなり河なきなりてはくるしかりけり」(古今集・十三・恋三・六二八・壬生忠岑)、「思ふ事なりといふなるすずか山こえてうれしきさかひとぞきく」(拾遺集・八・雑上・四九四・村上天皇)のように、第二句末に「いふなる」の形で位置し、その後にくく体言の連体修飾句となるパターン、もう一つ

は、「すみよしとあまはつぐともながあすな人忘草おふといふなり」(古今集・十七・雑上・壬生忠岑・九一七)、「みな月のなごしのはらへする人は千とせのいのちのぶといふなり」(拾遺集・五・賀・二九二)と結句に置かれるパターンである。いずれも挙例のように、「といふなり」と伝聞の形で、ある物事(前者は「……といふなる」に係る体言)についての、一般的、普遍的内容を述べる。伝聞であることよって、その内容の一般性、普遍性を請け合うことになるのである。

【補注】

本釈論では、【通釈】末尾にカッコ書きで示したように、当歌の主意は、七夕の夜に女のもとを訪れたものの、女に拒まれた男のぼやきを歌つたものとみなす。その理由は以下のとおりである。

【語釈】で取り上げたように、格助詞「と」は、その内容からして、初句から「わたる」まですべてを引用すると見るのが妥当であろうが、係り結びを優先するならば、「たなばたのあまのかはらをわたる」の部分のみが引用となる。問題はそのように捉えての解釈が可能かということである。

ポイントは、「たごよひこそ」と「といふなれ」がどのように結び付けられるかである。

「いふ」を発話動詞ととったとしても、その主体や状況を考えると、つながりが不自然である。今夜だけそれを言うわけではないからである。「たごよひこそ」が特定するのは「あまのかはらをわたる」ことではなければならない。

(二)で、一首の表現として、次の二点をおさえておきたい。

一つは、当歌は「こそ……已然形」という一文で構成されているという点である。たとえば、「ひさかたの天つみ空に照る月の失せなむ日こそ」(将失日社)我が恋止まぬ(吾恋止目)」「(万葉集・十二・三〇〇四)、「相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくも見ぬ」(古今集・十四・恋四・七四〇)のような例は、結びの後に、逆接の含みをもって相手に対する心の内を言外に表わす。当歌も、織姫と彦星の年に一度だけ逢える七月七日の今宵なのに、あなたはつれないと、言外に恨みを含むのではないか。

もう一つは、「いふなり」という伝聞表現である。すでに述べたように、七夕伝説が周知であるにもかかわらず、わざわざ「……といふなり」と言つのは、あきらかにおかしい。あえてその

必要があるとすれば、それは日本でのではなく、中国でのあり方である。つまり、日本では、天の川を渡るのが彦星であるが、中国では織女が天の川を渡るのであって、それは必ずしも周知ではない。それゆえの「といふなれ」という伝聞表現なのである。

この二点をふまえた時、引用された内容を表現するための係り結びとすれば、「ひととせにただこよひこそたなばたのあまのかはらをわたれといふなり」となるところであるが、詠み手自身の心境を表わす、逆接の含意かつ当歌の本意を示すためには、係り結びにおける意味的な整合性よりも、歌末を「いふなれ」という已然形にするほうを優先したということである。そして、その心境はまさに「ひととせにただこよひこそ」という限定においてだったのである。

赤人集には、「ひととせにただこよひこそたなばたのあまのかはらをわたるてふなれ」(赤人集・六二)の本文で載る。

【比較対照】

この句は、現存の白氏文集には見当たらない。本集の句題として初めて登場するが、新撰朗詠集(秋・七夕・一九四)でも、同句を含む二句を挙げ、白氏作とする。ずいぶん後に、室町後期の三条西実隆の家集である雪玉集、実隆男の実条の家集である称名院集にも同じ句題が見られる。

やむなく新撰朗詠集の二句を示す。

今宵織女渡天河 今宵 織女、天河を渡る。

朧月微雲一似羅 朧月、微雲、一らに羅に似たり。

この二句は、柳澤良一『新撰和漢朗詠集全注釈』(新典社 二〇一一年)は、七言絶句または七言律詩の第一・二句と推測している。同書によれば、「朧月」は「朧月」が正しく、国境の山にかかる月の意であり、第二句は、国境の山にかかったかすかな雲を、織女星が着ている薄絹の衣と見立てたものである。

本集にこれが句題として採られたのは、ひとえに秋季の行事としての七夕が取り上げられていたからであろう。

句題と和歌の対応関係はきわめて密である。「今宵」に「こよひ」、「織女」に「たなばた」、「渡」に「わたる」、「天河」に「あまのかはら」のように、句題の語すべてを和歌はほぼそのままに和語に置き換えている。その限りでは、句題の直訳に近いとも言えよう。

和歌で付け加えられたのは、順に「ひととせ」「ただ」「こそ」「といふなれ」であるが、前者は、「こよひ」に重きを置くための措辞であるのに対して、最後の「といふなれ」だけは、単に音数を満たすためだけではなく、詠歌独自の意図に関わる付加であり、そこに単なる直訳を越えたものが認められる。

その意図とは、【補注】に述べたような、詠み手自身の恋愛事情と重ね合わせることである。そもそも、それは句題内容からは到底、導かれえないのであって、「といふなれ」という伝聞表現は、日中の差異を引き合いに出すことにより、その思いを示してみせたのである。

心情逢秋一似灰(心情 秋に逢うて一に灰に似たり)

二九 ものをおもふ心のあきになりぬればすべて人こそみえわたりけれ

【通釈】

物思ひする(という)心の秋になったので(目に付く)すべてにあの人がずっと見え続けることだなあ。

【語釈】

ものをおもふ 物思ひにふける、思い悩むの意。「もの」は、自らの力では変えることのできない運命、宿命が本来的な意味であり、「ものおもふ」は、「人間の逃れがたいなりゆきと知りつつ、思いわづらう」意となる(大野晋『古典基礎語辞典』)。ここでは、格助詞「を」が、「もの」と「おもふ」を関係づけるが、同義としてよい。「もの(を)思ふ」は、本集に四例(三九・四二・六〇・一〇三)あり、古今集には一四例ある。「ものぞ思ふ」など係助詞がある場合も含む。割合からすれば、本集は古今集の約二倍になる。なお、「もの」については、二四番歌【語釈】「物ならば」参照。この句は、二句目の「心のあき」に係る。次項参照。

心のあき

「心のあき」は、「ものをおもふ」という状態の心を「あき(秋)」にたとえたものであり、悲秋を前提とする表現である。この句は、万葉集にはなく、当歌が、「名にしおへばしひてたのまん女郎花はなの心の秋はうくとも」(後撰集・六・秋中・三四三・紀貫之、初出は是貞親王家歌合三七番歌「なにしおはしひてたのまむをみなへしひとのころのあきはうくとも」)とともに、最初期の用例である。古今集には、「はつかりのなきこそわたれ世中の人の心の秋しうければ」(古今集・一五・恋五・紀貫之・八〇四)、「しぐれつつもみづるよりも事のはの心の秋にあふぞわびしき」(古今集・一五・恋五・八二〇)がある。全釈は「(私の)心は秋になるとい」と訳し、格助詞「の」を主格とするようだが、挙例はすべて連体修飾格を表わす。これは、「風ふけばなびく淺茅はなになれや人のころの秋をしらす」(村上天皇御集・六六)、「わすれゆく心の秋のつらければ我こそぎがはなをだにみむ」(赤染衛門集・三六三)のように、古今集以後の平安時代のほとんどの用例も同様である。当歌も、「心の」は「秋」の連体修飾語とすべきであろう。ほとんどの用例の「心」は、自分以外の人(多くは恋の相手)のそれであり、「秋」に「飽き」を掛けるが、詠み手自身の「心」を詠む当歌では、この掛詞は認められない。

なりぬれば

「なりぬれば」(動詞) + 「ぬ」(助動詞) + 「ば」(接続助詞)。「なりぬれば」は、「草枕旅に久しくなりぬれば(成復者) 汝をこそ思へな恋ひそ我妹」(万葉集・四・六二・佐伯宿禰東人)、「たまかづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心のうれしげもなし」(古今集・十四・恋四・七〇九)、「きみをいのるとしのひさしくなりぬればおいのさかゆくつるぞうれしき」(後拾遺集・七・賀・慶暉・四一九)のように、ほとんどが当歌同様、第三句に位置する。

「なりぬれば」は、本集には、他に「くろかみのしろくにはかになりぬればはるのほなどぞみえわたりける」(一一三)がある。第二句に位置するとともに、歌末が助動詞「けり」であることも、当歌と共通する。「みえわたりけれ」の項目と【補注】参照。

すべて人こそ

異本系統書陵部桂宮本は「すべてはひとそ」とあるが、藏中校本によれば、流布本系はみな、この同一本文である。本文の校訂はできるかぎりしないという、本釈論の方針に従い、ここも底本のままとする。「人」は、下句の原因を表す上句から、人一般ではなく、特定の人(おそらく恋の相手)であろう。詳細は、【補注】参照。副詞「すべて」は、「みえわたりけれ」に係る。「すべて人こそ」という句は他に用例が見出しがたく、「すべて」が「見えわた

る」または「見ゆ」に係る用例も同様である。「人」と「みえわたりけれ」の関係については次項参照。

みえわたりけれ

「みえわたりけり」の句は、万葉集には用例はない。平安時代までの用例を見ると、「秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」(後撰集・六・秋中・紀貫之・二七二)、「浦ちかくたつ秋きりほもしほやく煙とのみぞ見えわたりける」(後撰集・六・秋中・二七三)、「おしなべてさくらぎくはやへやはなのしもぞみえわたりける」(後拾遺集・十七・雑三・藤原公任・九八二)のように、結句にあつて、「Aは、Bぞ(こそ)」、みえわたりける(けれ)の構文で、Bは「見えわたりけり」の連用修飾語、特に二格、卜格といった補語となることが多い。挙例からわかるように、ある状況のもとにある(その状況はAの連体修飾語で示される)主題Aについて、その状況下では意外な様に見え続ける(あるいは一面に見える)ことに気づいたことを表わす。作者の工夫の焦点は、係助詞が下接するBにある。しかし、「みえわたりけり」の最初期の用例である(寛平御時后宮歌合七九番歌を初出とする後撰集二七三番歌も同時期)当歌は、「……ば、……こそみえわたりけれ」の構文で、特殊である。本集には、同様の表現は他に二例見え、「おきべよりふさくる風はしらなみのはな」の「みこそみえわたりけれ」(六八)は、一般的な構文であるのに対して、「くろかみのしろくにはかになりぬればはるのほなどぞみえわたりける」(一一三)は、当歌と似た構文である。「人」と「みえわたりけれ」との関係は、格助詞「に」「と」の省略は考えにくく、「人」がみえわたりけれとするのが妥当だろう。「主語+みえわたりけり」の用例は稀少ながら、「世中をいとひてあまのすむ方もうきめのみこそ見えわたりけれ」(後撰集・十八・雑四・小町姉・一二九〇)、「そらはるとやみのよるながむればあはれにもぞ見えわたりける」(増基法師集・一〇六)がある。また、補助動詞「わたる」には、時間的と空間的な意味があり、ここではいずれとも解しうるが、上句「……なりぬれば」が時間的経過を表わしていることからすれば、ここも時間的継続を表すとするのがよいか。助動詞「けれ」は、「こそ」の結び。【補注】参照。

【補注】

下句の「人こそみえわたりけれ」は、句題との対応関係から考えれば、「はひとそみえわたりける」の誤写である可能性がきわめて高い。おそらく「すべてはひとそ」という文字連続におい

て、書写の際に、和歌にはなじみの薄い「はひ(仄)」という語が分節されえなかつたからである。その結果、「ひと」というつながりを認め、「すべてはひとと」と分節し、「は」を不要と見てか、音教律を整えるために、「ひと」の後に「こ」を補い、それともなつて結句を連体形から已然形に変えたと想像される。さらに、「ひと」を「人」と漢字表記することにより、その本文が確定してしまったのであろう。

同じことは、六〇番歌「ものを思ころはこひとくたくれどあつきたきにはおよばざりけり」にも当てはまり、第二句の「こひ」を、異本系書陵部本文では、「心灰不及燠中火」という句題に対応させるように、「はひ」としているのである。

しかし、これはあくまでも推測にすぎない。問題はこの本文でも解釈しうるか、しうるとすれば、どのような解釈かという点である。解釈できなければ、単なる誤写として処理するしかないが、本集の和歌が句題の直訳ではないという、本積論の立場からすれば、句題との対応関係を優先することのみで、本文を校訂することはしない。

解釈上のポイントは、次の二つである。一つは、上句の「心の秋になりぬれば」である。この「の」という助詞は、【語釈】に記したごとく「心の秋」という名詞句を構成する、連体格ととる。つまり、「ものをおもふ」という状態は、普通の「心」ではなく「心の秋」だからということである。

もう一つは、下句である。上句が下句の原因・理由となるのであるから、「ものをおもふ」という心の状態を考えれば、「すべて人こそみえわたりけれ」は、何を見ても、その思う相手のことが目に浮かぶということではないだろうか。つまり、「人」は【語釈】で示したように、人一般ではなく、特定の人のことである。初句の「ものをおもふ」のも、その人のせいに他ならない。

悲秋という観念は、悲しいという感情が人事的な事情の如何を問わず、秋という季節そのものに起因することをいう。当歌上句は、そのことをふまえたうえでの表現であり、「ものをおもふ」||「秋」ということである。それを「心」に対する比喩関係とみなせば、実際に季節が秋でなくても成り立ちえようが、とりわけ秋ならば「ものをおもふ」ことが否応なく募るはずである。

和歌において「ものをおもふ」理由の最たるものは、恋とくには忍ぶ恋である。その状態にあるときは、寝ても覚めても相手のことを想い、何を見聞きしても、その相手が浮かぶ。それが下句の表す「すべて人こそみえわたりけれ」なのである。

なお、当歌は、赤人集に「ものをおもふころのあきになりぬればすべてはひとぞみえわたりける」(六四)の本文で載る。

【比較対照】

原抛詩は、次の、白氏文集の七言律詩「百花亭晚望夜歸」(卷第十六・〇九四九)であり、句題は頸聯の第二句による。

百花亭上晚徘徊 百花亭上、晩に徘徊すれば、

雲影陰晴掩復開 雲影、陰晴、掩おほうて復た開く。

日色悠悠映山尽 日色悠悠として、山に映じて尽き、

雨声蕭颯渡江来 雨声蕭颯として、江を渡りて来り。きた

鬢毛遭病双如雪 鬢毛、病に遭つて双つながら雪の如く、

心緒逢秋一似灰 心緒、秋に逢つて、一に灰に似たり。

向夜欲歸愁未了、なん夜に向んとなんして、帰らむと欲して愁ひ未だ了らず、

滿湖明月小船廻 滿湖の名月、小船か廻る。

頸聯二句が自らの老いを描写しているのは明らかであり、第二句はそれが心のありようにも及んでいふことを示している。「心緒」を「灰」にたとえるのは、「心灰」という語もあるくらいであり、老病の身のせいで、心が冷え切つた状態になつたことを表わしている。

この詩の季節が秋であると知れるのは、まさにこの句の「逢秋」という表現からであつて、千里が句題として選んだのも、それが理由であらう。

当歌を底本文に即して、句題との関係を見れば、表現上対応しそうなのは、「心緒逢秋」に對する「心のあきになりぬれば」という上句しかない。ただし、違いはある。句題では、「心緒」が「秋」という別物に「逢ふ」のに対して、当歌では、心そのものが秋になるのである。つまり心も秋になると、物思ひをするということであり、句題とは違って、心一般あるいは平常の心ではない。

それに対して、当歌下句は、異本系書陵部本の「ひとつはひとぞみえたりける」ならば、句題の「一」が「ひとつ」に、「似仄」は、「と見ゆ」が和歌の見立て表現でもあるので、「ひとつはひとぞみえたりける」にほぼそのまま対応していて、上句と合わせて、句題全体におおよそ即した表現になっていると言える。しかし、底本文では句題とは対応させようがなく、当詩全体の表現を見ても、つながりは認められそうになく、和歌独自の展開として捉えなければならぬ。

あえてつながりを見るとすれば、尾聯第一句内の「愁未了」である。これは、秋夜の景色を堪能することにより心を慰めようとしたにもかかわらず、ということであって、「愁」すなわち「ものをおもふ」状態がなお続いたまま帰るということである。その理由は異なるものの、当歌における詠み手も同じ状態にあったとみなされる。

当歌は、和歌一般からすれば、秋歌でありながら、秋の風物をいっさい取り上げることなく、しかも恋歌の趣が強いという点で明らかに異色であるが、本集においては決して珍しくない。当歌において見るべきは、悲秋という觀念を、秋という季節についてだけでなく、「ものをおもふ」ということから、恋にも及ぼそうとしたことではあるまいか。

秋悲不到貴人心秋の悲しきは、貴人の心に到らず

四〇 おほかたのあきをかなしとみることにあだなる人はしらずぞありける

【通釈】

(私は) 例年どおりに、秋を悲しいと思うことなのに、いい加減な人は(秋が悲しいとは)まったく気付かないでいることだよ。

【語釈】

おほかたの 三六番歌に同じ。【語釈】該項を参照。

あきをかなしと 「あきをかなし」の句はごく少なく、三代集までには用例を検索しがたい。平安時代末期になって「さをしかも秋をかなしとおもへばやときしも声をたてて鳴くらん」(太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合・鹿・二五・藤原重孝、また動詞「悲しむ」の例として「夏ふかきもりの木すゑにかねてより秋をかなしむせみのこゑかな」(六百番歌合・夏下・寂蓮・三〇〇)が見られる。

みること 「あきをかなしとみること」は、中国由来である悲秋の觀念による句。「みる」の本来の意味は、視覚のはたらきで物事を知ることであるが、そこから、主体が何らかの判断を下すことを表わすようにもなった。該歌の「……を……とみる」は、「春の野に霧立ち渡り降る雪」(布流由岐傳)人の見る(美流 まで梅の花散る」(万葉集・五・八三九)、「いたづらに世にふる物と高砂の松も我をや友と見るらん」(拾遺集・雜上・紀貫之・四六三)、「夏の夜はともすはたるのむねの火ををしもたえたる玉とみるかな」(古今六帖・六・ほたる・紀貫之・四〇一二)など、見立ても含めて、「(見て) 思う」「判断する」を表わすことが多い(大野晋『古典基礎語辞典』)。「こと」は形式名詞で、上句を名詞化し、秋を悲しく思う状態を表わす。

「みること」という表現は、万葉集にはないが、平安時代以後は「もの思ふにつきみること」はたえねどもながめてのみもあかしつるかな(道信集・三三〇)、「くにもせにつねにあふなはたつめれどあひ見る事はただこよひなり」(古今六帖・一・七日の夜・一三七)など、多く見られるようになる。句末の助詞「に」については、「しらずぞありける」の項を参照。

あだなる人は 全釈は、「あたる」を誤写として「あてなる」に校訂する。蔵中校本でも流布本系で「あてなる」とする本文が複数あり、「た」に傍記して「て」とするものも複数ある(異本系書陵部桂宮本は「あたる人」)。このような校訂は、【比較対照】に示すように、句題の「貴人」に對応させるためである。しかし、全釈も言うように、和歌に「あてなる人」の用例は検索しがたく、そもそも「あてなり」自体がきわめて稀である。いっぽう、周知のように、「あだなり」は、歌に多数詠まれ、「あだなる人」の用例も見える。この本文で歌意も通るので、底本のままとする。「あだなる人」は、歌に詠まれる場合、「いとくもうつろひぬるかきくればなあだなる人もみてこりぬべし」(忠安集・一七)、「花ならで花なるものはしかすがにあだな

る人の心なりけり」(貫之集・八八八)など、ほとんどが男女関係において不実な、浮気な人の意で用いられる。その意味では、第二句の「あき」が「秋」と「飽き」との掛詞とみなすことにもつながらる。

しらずありける 「しる(知)」内容が、「おほかたのあきをかなしとみる」とあるとすれば、両者の関係を示すのは「を」であって、当歌のような「に」ではない。「しる」内容が省略されていないとするならば、それとして想定されるのは、「おほかたのあきをかなし」と「しる」という関係以外にはない。「に」は、くに対してという対比を表わし、「おほかたのあきをかなしとみる」のに対して「おほかたのあきをかなしとみらず」ということである。この対比のそれぞれの主体は、後者が「あだなる人」と明示されるが、前者は非明示である。和歌における非明示の主体はたいして詠み手自身であり、当歌にも当てはまる。すでに述べたように、初句の「おほかたの」から、人一般とはならない。

【補注】

「あだなる人」は、【語釈】でも触れたように、和歌では男女関係において使われるのが普通であり、それに関連づければ、「をみなへし花の心のあだなれば秋にのみこそあひわたりけれ」(後撰集・六・秋中・二七六)、「あだなりと我は見なくにもみぢばを色のかはれる秋しなれば」(後撰集・七・秋下・三九〇)、「むすびけむ人のころはあだなれやみだれてあきのかせにちるらん」(伊勢集・二五八)などのように、恋歌ではなく秋歌であっても、「秋」に「飽き」が掛けていると読み取れよう。

悲秋の觀念の受容と定着は、平安初期の嵯峨天皇御製「重陽節神泉苑賦秋可哀」と応制八首(経国集卷二)における悲秋の漢詩の集团的模倣から、古今集所収のよみ人知らず歌や、初期歌合の場を通じてなされたときれる(小島憲之『上代日本文学与中国文学 下』塙書房 一九六五年、鈴木日出男「悲秋の詩歌——万葉と古今の間——」『古代和歌史論』一九九〇年東京大学出版会、渡辺秀夫「立秋詩歌の周辺」『平安朝文学と漢文世界』勉誠社 一九九一年など参照)。本集成立の寛平十六(八九四)年は、そのような、和歌における悲秋の觀念の定着途上の頃である。

単に「秋はかなし」ではなく、「おほかたのあきをかなしとみる」という、一種持つて回ったような、当歌の言い回しは、悲秋という捉え方が和歌的な実感としてはまだ十分に定着して

いなかったことを如実に物語っている。だからこそ、当歌における「あだなる人」との対比は「飽き」に対する恋愛当事者の感受性の差をうたう恋歌の体裁を借用して、秋に対する悲しみの感じ方の差を示そうとするものだったと考えられる。

なお、当歌は、赤人集に、「おほかたの秋をあはれとみることもあてなる人はしらずありける」(赤人集・六五)の本文で載る。

【比較対照】

句題の原拠詩は、次の、白氏文集の七言絶句「早入皇城 贈王留守僕射」(卷第六十八・三四七二)であり、当句題はその結句に位置する。

津橋残月暝沉沉 津橋の残月、暝、沉沉

風露凄清禁署深 風露、凄清、禁署深し。

城柳宮槐護搖落 城柳、宮槐、護りに揺落するも、
みだ さうらく

悲愁不到貴人心 悲愁は到らず、貴人の心。

詩後半の「城柳宮槐護搖落 悲愁不到貴人心」の二句は、千載佳句(秋興・一六二)、和漢朗詠集(落葉・三〇九)にも採られる。ただし、「悲愁」の語は、両集にも「秋悲」とする本文があり、本集諸本も、蔵中校本によれば、すべて「秋悲」のようであるから、千里が見た白詩文集は句題どおり「秋悲」だったのかもしれない。

結句の「貴人」は、詩題からすれば、この詩を送った相手の王留守僕射であろう。皇城の中にのみいて、外の秋の様子を知らないことを皮肉つたと見られる。しかし、その意を汲んで、句題として選んだとは考えがたい。おそらく眼目は「秋悲」にあり、これを句題として採る段階で、「貴人」に対して、そのままの「あてなる人」ではなく、音も近い「あだなる人」を想定していたのではないかと見られる。

それ以外では、句題内容を当歌はほぼ満たしている。「秋悲」に対しては初句から第三句までが、「不到」に対しては結句が相当し、「心」に対しては結句内の「しる（知）」が関連している。ただし、構文が異なり、句題の主題が「秋悲」であるのに対して、歌では「あだなる人」が主題となっている。

そのうえで、表現として歌に加えられたのは、初句の「おほかたの」、第二句の「みることに」、そして結句の「ぞ……ける」という係り結びである。強調の係り結びは、主題の移行にもなっており、「あだなる人」のほうに、より焦点を置くためであろう。第三句もそれと関わって、

「秋悲」が秋そのものではなく、秋に対する人の内面的な行為の結果としてあることを示すためと考えられる。初句の「おほかたの」は三六番歌と同様「あきをかなしとみること」がたまたまその年だけということではなく、毎年であることを示す。原拠詩の三句目までに描かれる早朝の情景も、それに反くものではない。

秋歌として考えれば、句題と同じく、「秋悲」を主題とするほうがふさわしかったにもかかわらず、あえて「あだなる人」のほうを主題としたのは、【補注】に述べたように、その観念の未定着によるものであろう。それを感得しうるのが詠み手すなわち千里であり、「あだなる人」というのが周囲の歌詠みのこととすれば、原拠詩と同じく、その人々に対する皮肉を含んでいたのかもしれない。

An Investigation and interpretation of ‘*Oeno Chisato-shu*’ (大江千里集) (10)

KOIKE Hiroaki*¹ and HANZAWA Kan’ichi*²

This paper is an investigation and interpretation (稜論) of ‘*Oe no Chisato-shu*’ (大江千里集) which is an anthology of Waka (和歌 = ancient Japanese poems) by Oe himself.

In this anthology, as usually called Kudai-waka (句題和歌), each Waka is given one phrase poetic title from Kanshi (漢詩 = ancient Chinese poem) selected by Oe.

The authors of this paper think that the mutual relations between expressions in both Waka and Kanshi have various patterns. So, the central purpose of our investigation is to concretely explicate the actual condition of all these patterns. And first, this paper treats of Waka No.36~No.40 of ‘*Oe no Chisato-shu*’.

キーワード：大江千里，句題，白氏文集，

*¹ 工学科リベラルアーツ教育院教授。本研究には、小池について交付された J S P S 科研費 16K02390 (基盤研究 C) による研究成果が反映されている。

*² 共立女子大学文芸学部教授

